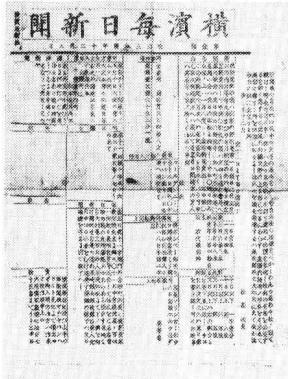


ジャパン・ヘラルド 創刊号
(1861年11月23日)



横浜毎日新聞 創刊号
(明治3年12月8日)



開港のひろば

NEWS YOKOHAMA ARCHIVES
OF HISTORY

●編集・発行／横浜開港資料館

横浜市中区日本大通3

電話 045(201)2100

〒231

企画室

●発行日／昭和60年2月1日

●印刷／(有)三信印刷所

横浜と新

収蔵資料の紹介

歴史資料としての新聞は、過去の多種多様な情報の宝庫であり、過去の人間の営みの姿を生のまま今に伝える。誰でもが親しみ易く、利用頻度の高い資料でもある。また、横浜は日刊邦字紙発祥の地である。今回は、横浜と新聞との関わりを考え、主な所蔵新聞を紹介しよう。

我が国における近代的新聞は、一八六一年(文久元)六月三日、英人ハンサードが長崎で創刊した『ナガサキ・シッピング・リスト・アンド・アドヴァタイザ』を嚆矢とする。五ヵ月後、彼はスタッフ一同と横浜に移り、一月三日から『ジャパン・ヘラルド』を始めた。地方紙から「日本の新聞」への発展を目指む彼が、「官公署や一般の情報の中核であり、より重要な商業上の中心地であるこの地——横浜に移ることが絶対に必要」(ヘラルド・第一号)と考えたからに他ならない。横浜では、居留地の隆盛に伴い、この後タイムズ紙やガゼット紙、メール紙などの創刊が相ついた。

開国後の幕府は、海外情報の収集のため、オランダ語や中国語の新聞を入手、蕃書調所に翻訳・翻刻させ、これを幕府要路に示し、後には江戸の書肆から版行させたが、それはごく一部の狭い範囲に

止った。これとは別に、横浜居留地で、一般的日本人向けの新聞が登場したのである。一八六四年(元治元)、米国籍の日本人ジョセフ・彦(浜田彦感)は、手書きの『新聞誌』を、翌年に木版『海外新聞』と改題・発行し、一八六七年(慶應元)には英人ベリーが『万国新聞紙』を始めた。彦の新聞は、『童子の輩にも読なんことを欲するがため平易な文章を心掛け、ニュースの速報性を信条とした。記事は、商品相場のほか、海外の新事情と新知識を、入港の船がらす諸外国新聞から訳出し、居留外商の広告(『万国新聞紙』は日本商人の広告をも掲載)、アメリカ建国史や旧約聖書和訳を掲載した。

慶應四年、米人ヴァン・リード刊行の『横浜新報もしほ草』は、新聞の普及・大衆化のうえで、特筆に値する。

慶應四年、米人ヴァン・リード刊行の『横浜新報もしほ草』は、新聞の普及・大衆化のうえで、特筆に値する。

維新政府の取締りで姿を消したな

かにあつて、居留地発行のため弹性を逸れ、ひとり明治三年まで存続した。まさに、我国に新聞を誕生させ、発展を育んだのは、横浜の地であり、居留地で活躍する内商の需要に応じて生まれたのである。明治三年一二月八日、最初の日刊邦字紙『横浜毎日新聞』が、「四民中外貿易の基本を立て、皆自商法の活眼を開かしめん」と創刊の辞を述べ、この横浜で産声をあげたのも、故なしとしない。

新聞は、日々の社会的諸相の記録であり、過去の歴史的瞬間の姿を鮮やかに今に伝える歴史資料である。当資料館は、横浜で発行された邦字・外字紙の収集を積極的に行っており、横浜毎日新聞(明治三~大正二五年)、横浜貿易新聞(明治三~大正二五年)、ジャパン・ヘラルドやジャパン・ガゼット、エコー・ド・ジャポン紙など居留地発行外字紙をマイクロフィルムによって体系的に整備し、順次複本化を進めている。このほか、特色ある資料として、絵入りシヨン(一八四三~一九四四、二五冊)、ザ・ファー・イースト(一八七一~七八、八冊)各紙の原本を所蔵し、閲覧利用に供している。

館長対談

近盛晴嘉氏を迎えて



館長 近盛 晴

今回は、「ジョセフ彦と横浜の新聞」展の中心であるジョセフ彦の研究家であり、三十多年前から「ジョセフ彦記念会」を主宰されている近盛晴嘉氏をお迎えして、彦と海外新聞についてお話しを伺うことにしました。最初に、近盛さんは、いつ頃どうい動機で彦に関心をお持ちになつたのか、お話しいただければと思います。

近盛 新聞記者になりたいと思って早稲田大学に入学し、早稲田大学新聞の記者になって、新聞学の講義も聞いて、日本の新聞の歴史に関心を持つておりました。そして新聞記者になつたのですが、たまたま昭和一〇年に神戸市が、彦の住んでいた家の跡に文化史跡碑を建てたんですね。

そこには、英文で Pioneer of Japanese Newspaper と書かれています。日本字では「本邦民間新

聞創始者」と刻んでおり、官板バタビヤ新聞を日本最初の新聞としているわけです。そこで、英文と日本文では意味がちがう。日本字の表記はおかしい、間違いだと思いまして、そのようなことから、彦という人に対する世間の見方と

いうものが真実でない、とらわれたものがあるということに気が付いたわけです。官板バタビヤ新聞が、

日本新聞ではないというのは、バタビヤでつくつたものを日本で翻訳しただけであって、翻訳者は日本にいても、つくつた人は日本に

いない。これでは日本の新聞と申

せない。これに反して、彦の新聞は、米英の新聞雑誌をセレクトし

て、編集をして、クリエイトして

いるわけで、個性ある日本の新聞を創り出しているわけです。

それから戦後になつて、東京の青山墓地にある彦の墓はどうなつ

ているか見に行つたときに、無縁

さんだと知りまして、「日本の新聞の父の墓だから、日本の新聞社

の集まりである日本新聞協会で祭

祀してほしい」と日本新聞協会にお願いしました。そのとき、兵庫県阿門(あえ)村の蓮花寺に、彦が両親のために建てた墓があるから、青山の墓をそこに持つてきました。今いじやないかということで、嘉氏をお迎えして、彦と海外新聞についてお話しを伺うことにしました。

近盛 カトリックの信者として、キリスト教の教えを守った正直な男であったということですね。日本からアメリカに帰化していると、これが彼の一生にいろいろな影響を与えていた。日本人からアメリカへの帰化第一号として、お寺に移すとは、もつてのほかであります。バチカンの公使館を通じて異議申し立てがあつたのです。それで安井知事は困つてしまつたんだですが、編集局長に頼んで、読売基金で彦の墓を守りたいと知事に申請を出しまして、阿門村とカトリック教会に手を引いていたんです。それで、お前はアメリカ人だから、と云うわけです。日本人は、彼を日本人だと思つて面もあるし、でも、アメリカの人びとは日本人だと思つて、アメリカ人とは思つてないわけです。日本人は、彼が日本人だと思つて面もあるし、でも、英國のオールコックから、日本総領事に赴任するので、通訳になつててくれと頼まれたわけです。だから、彼は広東で、

いや、日本に帰つてアメリカの公用に会つて、使うところがないといわれたら、そのときはお願いしますが、もしれません、と言つて答えると、喜んでひき受けるわけです。オールコックは駐日英公使に昇進した人で、江戸の公使館より格の低い横浜領事館の、現地採用の通訳として彦は横浜へ帰つてくるわけです。こういうところに、アメリカに対する恩義を感じる考え方をもつていて。そういう人となり

ます。ところが、隣の隣人にも、同じく日本人の隣人にも、日本人とアメリカ人だから、アメリカのためを思つてやつてゐるのだけれど、やはり差別がある。また、開国当時は通訳として、日本語と英語と通じている人は他にいなかつたから、

館長 彦については、近盛さんの伝記『人物叢書』吉川弘文館がございますし、英文の自伝は平凡社の東洋文庫から『アメリカ彦

館長 彦について、近盛さんのがあるのかとよくきかれますが、何らそういうことはないのです。

近盛 彦について、近盛さんのがあるのかとよくきかれますが、何らそういうことはないのです。それが在任期間が短い。自分はアメリカ人だから、アメリカのためを思つてやつてゐるのだけれど、やはり差別がある。また、開国当時は通訳として、日本語と英語と通じている人は他にいなかつたから、

ない悩みを持つていても、彦の人生への処し方は、天のおぼしめしに従う人生を歩むことを貰いました。

館長 日本ではほとんど教育を受ける機会をもたず、アメリカで初めてその機会を得たわけですが、それについても、彦の自伝を読んでみて、人間にしっかりとして、同時に、知的にも非常に優れていたという感じがします。その点でも、もともと素質があったのではないかという気がしますね。

近盛 確かにそうでしょうね。利発で、正直者でした。

館長 それに努力家でもありました。

近盛 努力家ですね。また、境遇が恵まれていた。彼はサンフランシスコの初代商工会議所の会頭や上院議員の秘書を務めたり、三人の大統領に会っています。漂流民の日本人が、アメリカの三人の大統領と握手する。リンカーンと会つた、ただ一人の日本人です。そのリンカーンの民主主義を、木戸孝允や伊藤博文に伝えていた。

戸孝允や伊藤博文に伝えていた。リンカーンに一度会つたからといつて、それで解るわけではないけれども、しかし、リンカーンの偉大きさをかねてから知つていて、握手するとき、この人だと思ってリンカーンの民主政治を体得し、それからアメリカの横浜領事館員として、より一層関心を持ち、アメリカの新聞、雑誌なども読んで、リンカーンのやり方を知つて、ま

すますリンカーンに打ち込んでいます。

墓木の日本にも民主主義をつくらなければならぬ。外様大名の国会と譲代大名の国会と、百姓・大町人の国会という三つの議会をつくれ、と徳川幕府に進言している。

幕府としては、そんなことはできません。しかし、大百姓と大町人の代表と、大名の国会を同格にせよというのは、日本の実情を知りません。だから奴だと、一言で否定するのはおかしいことだと思います。

あらゆる人のいろいろな文獻をみても、正直でまじめな男だと評価している。その素質をもつて、二〇才そこそこで日本へ帰つてくる。そして、日本は鎖国から開国へという情況の中で、それならばこういうふうにおやりなさいと進言しているわけです。明治四年、新政府に、新聞局をつくれと

いうことも進言しています。これが明治一四年の政変のもとににつながった公布日誌の発行計画につながっているということともいえるわけです。

ですから、民主主義というものが、日本の政治のあり方にとり入れる縁の下の種をもいた、官報発行の実を結ぶ種をもいた、とい

うことができると思います。

館長 最初と最後では…。

近盛 大体同じくらいのものです。

それは天理図書館の、出納帳などから推定することができます。当

時、横浜には木版の職人が少かつたと思うんですね。ですから月二、



近盛晴嘉氏

きたいと思いますが…。

近盛 海外新聞は、いま早稲田大

学にある彦旧蔵のものが唯一のま

とまつたものになっていますが、

ついで、と徳川幕府に進言して

いる。うちにも一、三ある。小

野秀雄先生が大正末期から昭和の

はじめにかけて調べられたものもあ

ったのですが、これは震災や戦災で焼失したものが随分あります、

数少くなってしまったのですが、幸にして、徳川御三家の南菴文庫、

松平春嶽文庫、肥後細川家の水青文庫、著書調所の用紙に柳河春二の筆写した神原文庫本などがだん

だんとわかつてきまして、欠落を

近盛 『新聞誌』時代は全部手書き

きだつたと思います。これは原物が残っていないのですが、それと彦の家にあつた一三一~一五号が筆

写になっています。それから二四号までが木版で、二五、二六号が

また筆写になっています。で、途

中の一三号からの筆写をみますと、それまでの木版印刷のものとは、

書き方が、ちょっと違うんですね。

館長 何部くらい出したんでしょ

うか。

一度に百部書くのでなく、無くな

つたらまた書くのであって、當時の人にとって、それほど苦にならなかつたんではないでしょうか。

写経ということもよく行なわれていましたし、一号毎の分量も多くありますし、黄本、赤本など、

そのちには木版印刷になつてお

り、大変だつたことは事実でしょ

う。

近盛 一〇〇部くらいだと、小野

先生は本間清雄から聞いたと言つていますね。岸田吟香もそう言つています。

近盛 一〇〇部くらいだと、小野

先生は本間清雄から聞いたと言つていますね。にもかかわらず、発行

をつづけた。その中で予約をした

購読者は、二年間が二人、一年間

が二人でしょう。他是一部買ひが少しのほかは、みんな贈呈ですか。

近盛 贈呈された人が、一体どう

いしている、生糸はと、そういうのはほとんど毎号でできますね。それは輸出関係者にとつては、唯

一のニュースソースですね。

近盛 今はそう思つけれど、

一度に百部書くのでなく、無くな

つたらまた書くのであって、當時

の人にとって、それほど苦にならなかつたんではないでしょうか。

近盛 『新聞誌』時代は全部手書き

きだつたと思います。これは原物

が残っていないのですが、それと

彦の家にあつた一三一~一五号が筆

写になっています。それから二四

号までが木版で、二五、二六号が

また筆写になっています。で、途

中の一三号からの筆写をみますと、

それまでの木版印刷のものとは、

書き方が、ちょっと違うんですね。

館長 何部くらい出したんでしょ

うか。

一度に百部書くのでなく、無くな

つたらまた書くのであって、當時

の人にとって、それほど苦にならなかつたんではないでしょうか。

写経ということもよく行なわれて

いましたし、一号毎の分量も多く

ありますし、黄本、赤本など、

そのちには木版印刷になつてお

り、大変だつたことは事実でしょ

う。

近盛 贈呈された人が、一体どう

いしている、生糸はと、そういうのはほとんど毎号でできますね。それは輸出関係者にとつては、唯

一のニュースソースですね。

近盛 今はそう思つけれど、

一度に百部書くのでなく、無くな

つたらまた書くのであって、當時

の人にとって、それほど苦にならなかつたんではないでしょうか。

話題など、いろいろな方面にわたっています。香川大学に、蓄書調所の用紙を使った翻訳原稿らしきものが一枚あります、その推敲のあとの苦心ぶりが察せられる。

政治、社会情勢の全く違う日本人が英文を読んで、翻訳した原稿のあとですから、推敲するのに非常に苦心をしている。彦の海外新聞も同じだったでしょう。

館長 そういう翻訳のプロセスを想像してみるのも面白いでしょうが、それにしても、翻訳していた人たちに非常に優れたジャーナリストがいた。本間はジャーナリストとはいえないかも知れませんが。

近盛 呴香の筆といいうものは相当影響している。例えば、文久三年に出た漂流記の序文と本記とでは、文の書き方が違うんですね。序文

は呴香の筆で、実にやわらかく、わかりやすい。本記の方はちょっと

かたい。同じように海外新聞もちょっとかたい。しかし、本間の筆でないと思われる手書きのもの

は、木版とくらべて、ちょっと幼稚です。手書きから木版印刷になると、スラスラッと、もとの本間の書き方になつていて。

館長 岸田吟香については、この

館で「ヘボン」展をやりましたときには、一部資料を出したわけですが、本間清雄について簡単な経歴を御紹介いただけませんか。

近盛 掛川藩の代々藩医の家系の人で、漢方医でしょうね。ですか

ら、本来は医者にならなければいけないところですが、彼は外国へ行きたいという希望をもっていた。

これからは蘭学でなく英学だとわかつて、横浜へ行って、たまたま洗濯屋から彦が筆記方を探してい

ると聞いて、彦のところへ行くわけです。当時、洗濯屋さんというわね。ハリスの日本滞在記なんかを見ましても、ハリスはヒュースケンから宿料とともに洗濯代を取つています。洗張りだけの日本式洗濯法から、外国流のクリーニング、ラウンドリーを初めてとりました。そのころ、日本人と外国人との接点としての洗濯屋さんの存在は注目されてよろしいでしょう。

館長 本間は、海外新聞に関係し

た以外に、新聞とはかわりはないのでしょうか。

近盛 その後はございません。彼は、彦が長崎に行つて海外新聞が

廃刊になつてから、しばらくして

徳川昭武に従つて万国博のパリに

行つています。明治になつて、天皇に電信機の説明をしたりしたこ

とはあるんだけれども、また、今度は外交官としてウイーンへ行つて、在欧一六年ののち、外務省の

人事課長を最後に退職するわけで

す。『植村正久とその時代』に、本間に関する一節がありますが、

影響ということではないんですね。近盛 当時、彼は英語を勉強するといでので、彦と別れたあと、ヘボンとかブラウン、タムソン、バラなどの宣教師とも接触しています。それから、オーストリアで洗礼を受け、植村正久からも洗礼を受け、一度洗礼を受けたという説もありますが、本間が陽チブスを見ましても、ハリスはヒュースケンから宿料とともに洗濯代を取つています。洗張りだけの日本式洗濯法から、外国流のクリーニング、ラウンドリーを初めてとりました。そのころ、日本人と外国人との接点としての洗濯屋さんの存在は注目されてよろしいでしょう。

館長 本間は、海外新聞に関係し

た以外に、新聞とはかわりはない

のでしょうか。

近盛 その後はございません。彼は、彦が長崎に行つて海外新聞が

廃刊になつてから、しばらくして

徳川昭武に従つて万国博のパリに

行つています。明治になつて、天

皇に電信機の説明をしたりしたこ

とはあるんだけれども、また、今度は外交官としてウイーンへ行つて、在欧一六年ののち、外務省の

人事課長を最後に退職するわけで

す。『植村正久とその時代』に、

本間に関する一節がありますが、

退官後は植村の神学社の事務を奉仕していました。

る、いつています。ゼネセスでないと、いついます。ゼネセスでは幕府はバイブルであるということが解らんわけです。彦の開闢のあらましが翻訳という言葉に該当するかどうかについては、異論もあるわけですが、僕は、日本の国内で翻訳し印刷し発売した、部数は少くとも売ったわけですから、海外新聞のものが禁教後に聖書を翻訳刊行した最初であるといつていいと思います。これからは、彦

の海外新聞の『開闢のあらまし』は、わが国の聖書翻訳の先駆として周知されてくると思います。

館長 そういう意味では、彦の海外新聞というのは、そのころの日本人びとに海外ニュースを伝えられたということがいえるのかも知れませんね。

近盛 恐らくそうではないと思う。

キリスト者としての彦、アメリカに帰化した彦の創意だと思います。

近盛 伝承されているところに、それとは

異なるわけですね。

(去る二月一三日の対談です)

ジョセフ彦のプロフィール

ジョセフ彦(幼名彦太郎)は

天保八(一八三七)年、現在の兵庫県加古郡播磨町古宮の農家

に生まれ、一歳のときに父を、嘉永三(一八五〇)年一二歳のとき

に母を亡くし、同年養父となる

ことが、彦の人生を大きく変えてしまう。栄力丸は、江戸から

の帰途、遠州灘で突風のため漂流。五一日に北太平洋上で米船に救われる。一年余りサンフランシスコで過した後、帰国途中マカオでペリー艦隊の到着を待つている間に、アメリカで勉強する気になり、アメリカへ引返す。サンフランシスコで育て

の親ともいうべきサンダースと知り合い、彼の庇護の下で教育を受ける。しかし、サンダースの経営する会社が倒産すると、学校をやめ、貿易会社や議員の秘書として働くようになる。この間、一八五四年ボルチモアの聖母マリア大聖堂でカトリックの洗礼を受け、ジョセフの名を用い始め、一八五八年には、日本からアメリカへの帰化第一号として市民権を得た。一五歳から二一歳までアメリカで過した神

彦は、一八五九年、開港した神奈川(横浜)の米領事館通訳として九年ぶりに帰国する。以後一時渡米するが、六六年まで横浜で過ごす。六三年秋に発行した『漂流記』の巻末には、アメリカの政治、法律、宗教、風俗等を図入りで紹介している。また六四年には、『海外新聞』を

発行、「わが国新聞の父」と呼ばれている。その後、長崎、兵庫等で貿易活動などに従事し、日本の近代化に尽力したが、明治三十東京で死去。六〇歳。

東京青山靈園外人墓地に眠る。

リヨンの秋

— 横浜リヨン姉妹都市提携
— 三五周年記念横浜フェアに参加して —

リヨンでの横浜フェア

三〇〇万都市横浜は、残念ながら足もとに及ばない。

横浜リヨン姉妹都市提携二周年にあたる今年度は、横浜市海外交流協会が中心となって記念行事が計画され、昨年一〇月にはリヨンで横浜フェアが開かれた。二月二日から一七日にかけては横浜でリヨン・フェスティバルが、当館でもその一環として「横浜と海外交流史」展が開催される。

横浜フェアの中心行事「横浜紹介展」の設営のための一員としてリヨンに着いたのは一〇月八日、家々の壁をはうツタの色づきはじめるころだった。ローヌ川にのぞむ会場のホテル・ソフィテルで深夜まで設営にあたり、翌日はコロン・リヨン市長を招いて、細郷横浜市長の主催するオープニング・パーティーが開かれた。翌一〇日から市内の文化施設を歴訪した。

リヨン散策

リヨンは人口約四〇万、フランス第三位の都市だが、一日かけて歩いて町中を回れる。市民共同体としての都市にとってはこのくらいが適当な規模であろう。文化施設は質量ともにすぐれており、

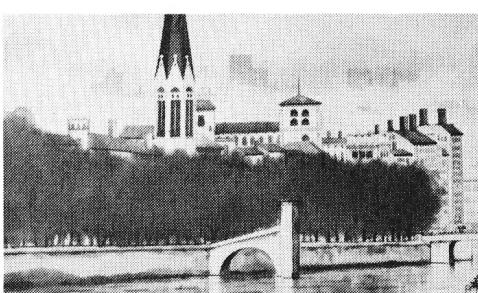
「フルビエールの丘」リヨンの歴史は、紀元前四三年ソース川のぞむフルビエールの丘に建設されたローマの植民都市にはじまる。丘の上には古代の劇場遺跡が発掘・公開されており、隣接の広大なガロ・ローマ美術館で出土品を見ることができる。近くのノートルダム聖堂からは市街の全景が展望できる。

（旧市街）中世後期の商業復興期に、リヨンは商業都市として発展するが、その舞台となつたのは丘の麓の旧市街（ビュイー・リヨン）であった。今なお一六世紀の町のたたずまいを残している。歴史博物館とマリオネット博物館の入っている旧ガダーニュ・ホテルの建物も一六世紀のものである。

（クロワ・ルースの丘）絹織物業の勃興したのも一六世紀のことである。その中心は市街北方のクロワ・ルースの丘であった。ここには絹織物工芸館があり、リヨンの人ジヤカードの発明した織機などが展示されている。

（新市街）一八世紀になると、クロワ・ルースの南方、ローヌ川とソース川の合流三角州に新市街が形成された。ベルクール広場をはじめ北側には市役所や商工会議所・総合美術館・印刷銀行博物館などがある。南側には織物歴史美術館と装飾美術館がある。

（サン・ジャン聖堂）新市街の金融街にはかつて横浜正金銀行のリヨン支店があった。初代支店長の川島忠之助は「八十日間世界一周」を翻訳し、わが国最初のフランス文学翻訳者として知られるが、若い頃は横須賀製鉄所や富岡製糸場、先のヘフト・リリエンタル商会で働いていた。な



ソーヌ川越しに見た旧市街のサン・ジャン聖堂（森泰章氏画）

に泊している。これがリヨンに足跡を記した最初の日本人である。使節一行も「当初ハ織物ノ名産タル世上第一ノ所」と書き記しているが、そのころヨーロッパでは蚕病が流行し、リヨンの絹織物業も大きな打撃を受けている。これを救つたのが横浜から輸出された生糸や蚕種だった。

リヨンへの輸出は、一八六六年、居留地八番館のヘフト・リリエンタル商会が最初だという。リヨンの紡織物問屋で働いていたボール・ブリューナは、この商会の生糸検査技師として来日し、のち富岡製糸場の創設に貢献する。また一八七二年、リヨンで学んだ京都西陣の織工佐倉常七らが持ち帰ったジャカード織機は日本の織物技術を革新した。

一二日は生糸貿易に関する史料を探査した。これは横浜市大の卒業生でリヨン大学に留学中の浜田道夫氏の協力で可能となつた。商工会議所資料室ではジャン・ミックシェル氏に一八世紀初頭からの会議所の年報を、織物歴史美術館付属図書室ではジェイエ女史に一九世纪後半リヨンで発行されていた生糸・紡織物専門の二種の新聞を見せていただいた。これらによつて横浜から輸出された生糸とりヨンの紡織物業の関係を知ることができた。

（齊）リヨンの市民は礼儀正しく、勤勉だが生活を楽しむことを忘れず、内気だが排他的ではない。カフェのテーブルで街行く人々をながめながらフルビエールの丘へ登る途中、ソーヌ川の下で枯葉の舞う音を聞きながらフランス・パンをかじつたり、フルビエールの丘へ登る途中の小さな公園のベンチに腰をかけて木もれ日の下で枯葉の舞う音を聞いたりしている時、異邦人にもわけへだてなくやすらぎを与えてくれる、そんな町である。（齊）

史料探訪

（新市街）二日は生糸貿易に関する史料を探査した。これは横浜市大の卒業生でリヨン大学に留学中の浜田道夫氏の協力で可能となつた。商工会議所資料室ではジャン・ミックシェル氏に一八世紀初頭からの会議所の年報を、織物歴史美術館付属図書室ではジェイエ女史に一九世纪後半リヨンで発行されていた生糸・紡織物専門の二種の新聞を見せていただいた。これらによつて横浜から輸出された生糸とりヨンの紡織物業の関係を知ることができた。

（齊）リヨンの市民は礼儀正しく、勤勉だが生活を楽しむことを忘れず、内気だが排他的ではない。カフェのテーブルで街行く人々をながめながらフルビエールの丘へ登る途中、ソーヌ川の下で枯葉の舞う音を聞きながらフランス・パンをかじつたり、フルビエールの丘へ登る途中の小さな公園のベンチに腰をかけて木もれ日の下で枯葉の舞う音を聞いたりしている時、異邦人にもわけへだてなくやすらぎを与えてくれる、そんな町である。（齊）

リヨンの市民

（新市街）二日は生糸貿易に関する史料を探査した。これは横浜市大の卒業生でリヨン大学に留学中の浜田道夫氏の協力で可能となつた。商工会議所資料室ではジャン・ミックシェル氏に一八世紀初頭からの会議所の年報を、織物歴史美術館付属図書室ではジェイエ女史に一九世纪後半リヨンで発行されていた生糸・紡織物専門の二種の新聞を見せていただいた。これらによつて横浜から輸出された生糸とりヨンの紡織物業の関係を知ることができた。

（齊）リヨンの市民は礼儀正しく、勤勉だが生活を楽しむことを忘れず、内気だが排他的ではない。カフェのテーブルで街行く人々をながめながらフルビエールの丘へ登る途中、ソーヌ川の下で枯葉の舞う音を聞きながらフランス・パンをかじつたり、フルビエールの丘へ登る途中の小さな公園のベンチに腰をかけて木もれ日の下で枯葉の舞う音を聞いたりしている時、異邦人にもわけへだてなくやすらぎを与えてくれる、そんな町である。（齊）

（新市街）二日は生糸貿易に関する史料を探査した。これは横浜市大の卒業生でリヨン大学に留学中の浜田道夫氏の協力で可能となつた。商工会議所資料室ではジャン・ミックシェル氏に一八世紀初頭からの会議所の年報を、織物歴史美術館付属図書室ではジェイエ女史に一九世纪後半リヨンで発行されていた生糸・紡織物専門の二種の新聞を見せていただいた。これらによつて横浜から輸出された生糸とりヨンの紡織物業の関係を知ることができた。

（齊）リヨンの市民は礼儀正しく、勤勉だが生活を楽しむことを忘れず、内気だが排他的ではない。カフェのテーブルで街行く人々をながめながらフルビエールの丘へ登る途中、ソーヌ川の下で枯葉の舞う音を聞きながらフランス・パンをかじつたり、フルビエールの丘へ登る途中の小さな公園のベンチに腰をかけて木もれ日の下で枯葉の舞う音を聞いたりしている時、異邦人にもわけへだてなくやすらぎを与えてくれる、そんな町である。（齊）

（新市街）二日は生糸貿易に関する史料を探査した。これは横浜市大の卒業生でリヨン大学に留学中の浜田道夫氏の協力で可能となつた。商工会議所資料室ではジャン・ミックシェル氏に一八世紀初頭からの会議所の年報を、織物歴史美術館付属図書室ではジェイエ女史に一九世纪後半リヨンで発行されていた生糸・紡織物専門の二種の新聞を見せていただいた。これらによつて横浜から輸出された生糸とりヨンの紡織物業の関係を知ることができた。

（齊）リヨンの市民は礼儀正しく、勤勉だが生活を楽しむことを忘れず、内気だが排他的ではない。カフェのテーブルで街行く人々をながめながらフルビエールの丘へ登る途中、ソーヌ川の下で枯葉の舞う音を聞きながらフランス・パンをかじつたり、フルビエールの丘へ登る途中の小さな公園のベンチに腰をかけて木もれ日の下で枯葉の舞う音を聞いたりしている時、異邦人にもわけへだてなくやすらぎを与えてくれる、そんな町である。（齊）

資料よもやまばなし

幕府人事と横浜開港

奇異な表題であるため驚かれる方も多いと思われるが、あらかじめ執筆の理由を簡単に述べておこうこととした。

私は当館の性格上、幕末の歴史を調べることが多い。そんな時、世に知られた幕府の要人の事歴や動向については比較的よくわかるのであるが、中・下級の幕吏になるとあまりよくわからないことが多く、業務に差支えて困ることもある。そんな経験から中・下級の幕吏の人事はどこでどう決められたかという単純な疑問を抱くに至り、多少調べたことがある。ここに粗雑ではあるが簡単に紹介し、読者からの御叱正と御教示を仰ぎたいと思うしだいで。

さきに資料館では、本誌の第六号の「横浜人物小誌」欄で、文久元年(一八六二)当時、神奈川奉行支配調役を経历した小笠原甫三郎の略伝を紹介したことがある。この人物は、就任後間もなく、家僕某がひき起した事件の嫌疑を受け解職されてしまい、その後、身の潔白が証明され名譽回復はなったものの復職することなく、家僕某がひき起した事件はなかつたという不幸な運命を辿つた幕束であった。また、この人

物は鳥居耀蔵の配下で活躍した小笠原貢藏の養子でもあったことも紹介したが、その後の彼の足どりを追つてみると養父の影響はあるり受けず、それなりに順調な昇進を遂げていたようである。

ところで、上述の如く甫三郎は神奈川奉行所の支配調役のポストに就くのであるが、それに際し彼はどのような経緯を経て該ポストを得ることができたのか、彼の人事をめぐる興味ある関係文書が数点あるので、そのうちの一点を紹介してみよう。

(前略) 甫三郎之事、御申越之通、當時之姿ニ候ハ、調役三而モ肯可申哉ニ候、此人之義石州左之文通ニ先々取人ニ不相成幸歟ト跡ニ而被申越候哉ニ観、人物之噂何歎聞込ニ而モ有之候哉ニ存候処、右之文通何見當不申、御序モ候ハ、甫三郎之人物如何被思候哉と御尋可被下候、其様子次第當人江モ御達可被下、(後略) 〔金沢文庫古文書〕第十七輯、依田家文書、七六号文書

この資料は長崎奉行であつた岡部長常から依田盛克に宛てられた文書の一部である。年代は当然文久元年以前である。

この書簡によると、小笠原甫三郎を神奈川奉行支配調役にするかどうかで岡部と依田、それに石州こと荒尾石見守との間でかなり議論されていることがわかる。それと同時に甫三郎がそのポストにふさわしい人物かどうかが、関係者の間で積極的に情報収集し、慎重な人物評価のうえに採用を決定していく形跡が他の書簡とのつき合せの結果明らかとなっている(同上文書)。

さて、当面ここで話題となつている岡部と依田という人物がどのような経歴を有した幕吏なのかについて簡単に紹介しておこう。

岡部は先述の長崎時代に蘭医ボンペから「日本人の中の文明人」と称讃された人物で、万延元年に永井尚志・岩瀬忠震と共に日蘭通商条約の締結をはたした一人であった。文久元年に外国奉行、同一年には大目付に昇進し、慶応二年に肺病で死去。彼は荒尾石見守として依田盛克とは長崎時代の僚友であった。また永井・岩瀬とも親交が厚かった。それは依田への書状中に「永井・岩瀬も私錦之命、旧冬有之候由、先々安心之事と相察申候、其他モ甲州行と相成候由氣之毒千萬、乍去江戸ニ居候よりハ甲州の方却而宜可有之事」(同上四九号文書) とあるのをみれば灑然である。

依田は慶応三年神奈川奉行並、明治七年外務省雇となりその三年

後には統通信全覽五〇五卷の編さんを完成した。この依田は岩瀬の死後、永井尚志とともに、彼を偲んで語り合う会を主催した一人であった。

以上みてきたことから、甫三郎の様な中・下級幕吏の人事は岡部・依田・荒尾といったレベルのグループ(又は派閥)によって決定されていったことがわかる。ただ、甫三郎とかゝる人物たちとの結びつきが未詳である。併せてこの事例(人事)がどの程度普遍性を有するのかはわからない。今後の課題としたい。

このような幕府人事は一般的の幕吏にとって常識であったのかもしれない。もしそうであれば将来性ある上級職とのコネ作りと、それへ向けた業績づくりが能吏とされない。もしそうであれば将来性ある上級職とのコネ作りと、それが幕府の官僚社会の実態に近かつたものであろう。そうした中にあって、開港場の奉行所の重要性を認識し、幕府の確固たる一定の方針のもとで対外的に対処することと望む幕吏もないわけではなかつた。

同時代の外国奉行所々員であつた杉浦愛藏なる人物は慶応三年、パリ在住の浄沢栄一にあて次のよう書簡を書いている。「天下の形勢如此ニ至り、當廟堂ニ而ハ日御役人方差除等頻々ニ而、更ニ朝進暮退の景況、夫ニ付外国局モ大二人種も人替、外国惣奉行、同惣奉行並、又ハ外国奉行並杯申

のことであるから、杉浦書簡の時代とはあきらかに状況は違つていていたことが述べられている。

先述の甫三郎人事は文久元年前のことであるから、杉浦書簡の時代とは、この本質は大同小異ではないかたかと考える。ただ、外国奉行の場合、かつて「良吏の測叢」と称された時代は去り、閑老と外國公使との間の取次役に低落していったのであるから俗吏の測叢化は時間の問題であつたのかもしれない(加藤英明「徳川幕府国外方…」)。

一方、神奈川奉行所の実情は、文久元年当时にあって、貿易仕法、税銀徵收等に不慣れのため堪能な外人を雇傭しなければ横浜開港の実効があがらないという事態に直面していた(小笠原文書「掌記」)。

開港場の要であつた両奉行の人事の一端を垣間みたにすぎないが、開国・開港による事態の推移は前述の幕府人事の旧弊からほるかに先行していたことは事実である。

横浜人物小説

6

異色の居留地外国人

ヴァン・リード

日本の文献にウェンリー、ベ

ンリウト、ワインリウなどの名で

登場するヴァン・リード Eugene M. Van Reedは、一八三五年、

ペニシルヴェニア州レディングに

生まれた。一八五一年、父に連れ

られてゴールド・ラッシュのカリ

フォルニアに移住するが、そこで

日本人漂流民の彥に出会ったのが

日本に興味を抱きしきかけとなつ

た。彥から日本語を習うなど、と

もに十代の少年の間に芽生えた友

情は、開港直後の横浜へとつなが

つていく。

一八五八年、「冒険心に駆り立

てられて「日本に旅立つたヴァン・

リードはハワイで彥に再会、とも

に日本へ向う。翌年六月、横浜開港とともに、彥は神奈川のアメリカ領事館の通訳として九年ぶりに故郷の土を踏み、ヴァン・リードは同領事館の書記の職を得た。

しかしヴァン・リードは半年ほどで商人に転身。横浜居留地で日本商人に鉄砲、時計、ランプなどを売ったり、幕末の金貨流出としてよく知られる小判の輸出にも手を染めている(森村市左衛門演

説速記『マルキの壁』)。

文久二年(一八六二)頃には、海岸沿いの居留地六番に商館を、

その向いの二七番に住宅を構えて

いるが、当時まだ百数十人ばかり

の居留地欧米人のなかで、ひとり

わ目立つ存在になっていたらしい。

乗馬姿が紹介されたり(下図)、「日本人の身ぶり、こはいろにて交り至而通人なり」と評判になっ

ている(『珍事五ヶ国横浜はなし』)。

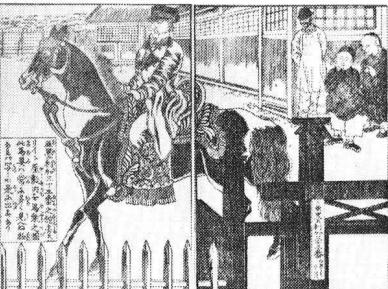
すでにその前年の文久元年(一八六一)には、商人向けの英会話書『商用会話』を編纂刊行してい

るが、これはまだ来日後二年ばかりの頃である。生麦事件の直前に島津久光の大名行列に出会いながら事無きをえたというエピソードも、かれの「日本通」ぶりを物語る。

ヴァン・リードは、その後、一八六三~六六年の間、アメリカの商社オーガスティン・ハード商会の社員となり、薩摩や越前と取引を行っている。

このハード商会在籍中の一八六年、ヴァン・リードはみずから求めて駐日ハワイ総領事となり、

一八六八年(明治元)、日本最初の



屋敷内に乗馬するヴァン・リード
(橋本玉蘭斎『横浜開港見聞誌』三編 文久2年刊)



コンピュータ情報利用への待望

ハワイ移民、いわゆる「元年者」を送り出した。この一件でかれは明治新政府の糾弾を招き、『悪徳商人』の評をとつたが、最近の研究では汚名を返上しつつある。

さらに注目すべきは、慶應四年、さきにジョセフ彦の『海外新聞』を口述筆記した経験をもつ岸田吟香と、『横浜新報もじは草』を創刊したことである。その五月十五日号では、『鬱理度』の署名入りで、國家統一の急務を訴えて「新策」を論じている。

その後、以前から患っていた肺結核が悪化。一八七三年、帰國途中の船上で没。まだ三八才になる

かならぬかの若さであった。(伊)

資料館の不断の充実には館員各

位の調査研究が要件であるとの前髙村さんの意見に同感である。私は外部から横浜居留地研究会に参加するものとして、この研究会について略述する。

日本の開国・開港、横浜の国際港都発展の原点となつたこの地に横浜開港資料館が開設されて四周年を迎えるとしている。

市民に開かれた資料館として、「横浜開港史の調査研究」として講演・講座、資料の収集・閲覧出版などに当初の計画どおり充

実・発展がなされ、この分野における市民・研究者などのメツカとして地位を築かれたと思う。

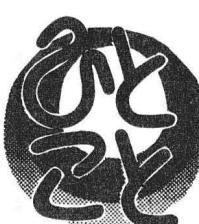
豊富な内外の公文書・記録、新聞、個人の貴重なコレクション・文書などが容易に閲覧でき、とくにジヤパン・ディレクトリ

ー(複製本)が一括して閲覧室書架に備えられている。そのうえこの居留地人名録は、数巻の欠本を補つてコンピューター入力の計画が進められており、整

理完成すれば各年代の居留外国人・商館・団体の推移・動勢に

と日本史のそれとの関連・位置づけの考究、これらの歴史形成文化など諸側面からの内外人の交流、横浜の文明開化・近代化

と日本史のそれとの関連・位置づけの考究、これらの歴史形成文化など諸側面からの内外人の交流、横浜の文明開化・近代化



についての基礎的情報が提供され、情報文化センターとして一層重要な拠点となるであろう。その早期の利用が待望される。

実な成果を目指して一層調査研究を進められるよう期待する。

研究会に参加して
(横浜市立大学教授 秋本益利)

